

ある夜、雪いたう降りて、表の人音ふけゆくまま

ある夜、

雪が激しく降って、

家の前の人の足音も夜更けと共に消えてゆき、

ふすま

ふ

に、衾引きかづきて臥したり。あかつき近う

布団を被って寝入った。

夜明け近くに

なつて、障子ひそまりあけ、盗人の入り来る。

なつて、

障子をこっそりと開け、

盗人が入ってくる。

娘おどろいて、「助けよや人々。よや、よや」と

娘が驚いて、

「助けてよ、皆さん。おおい、おおい」と

や

うち泣く。野坡起き上がりて、盗人に向かひ、

泣く。

(芭蕉の門人の志太)野坡が起き上がって、

盗人に向かつて、

いほ

せいだん

めし

「わが庵は青氈だもなし。されど、飯一釜、よき茶

きん

しほ

そつではあるけれども、ご飯一釜と

良いお茶

一斤は持ち得たり。柴折りくべ、暖まりて、

一斤は持つことができている。柴を折って(囲炉裏に火を)くべて、(あなた方が)暖まって、

ア

人の知らざるを宝にかへ、

(盗人に入った罪を)人に知られないようにすることを宝の代わりに差し出し、

明け方を待たでいなば、我にも罪なかるべし」と、

夜明けを待たないで(あなた方がここを)立ち去れば、私にも罪はないでしょう」と

談話常のごとくくなれば、盗人もうちやはらいで、

会話(の調子が)平常なので、

盗人も気持ちや和らいで、

イ

かはひ

「まことに表より見つるとは、貧福、金と瓦のごと

「本当に、(家の)表玄関から見たのと比べると、

貧富の差が、金と瓦のよう(に大きい)。

ふくめん

し。ちらばもてなしにあづからん」と、覆面のまま

そつであるならば、御馳走をいただく」と、

覆面のまま

並びゐて、数々の物語す。中に年老いたる盗人、

並んで座って、

いろいろな会話をする。(盗人の)中に、年老いた盗人(がいて、その者が)、

机の上をかきさがし、句の書けるものをうち広げた  
机の上を手探りで物色し、  
句を書いているものを（見つけて）広げたところ、

るに、

草庵の急火をのがれ出でて

粗末な家で起こった急な火事から逃げ出て

けぶ

わが庵の桜もわびし煙りさき 野坡

我が家の（庭にある）桜もつらそうだ。火事の煙が木を襲い掛り、煙の花が咲いているかのようになって。

といふ句を見つけ、「この火いつのことぞや」。

「この火事はいつのことか」（と尋ねる）。

野坡がいはいく、「しかじかのころなり」。盗人手を  
野坡が言う、  
「いついつの頃である」。  
盗人は手を叩いて、

打ちて、「御坊にこの発句させたるくせものは、

「お坊さん（＝野坡）にこの俳句を詠ませた犯人は、

近きころ刑せられし。火につけ水につけ発句して  
最近処刑された。  
火事であっても水害であっても俳句にして

遊び給はば、今宵のあらましも句にならん。願はく  
たま  
こよひ  
遊びなされるならば、  
今夜の概要も俳句になるだろう。  
今聞かせて

は今聞かん」。野坡がいはいく、「苦楽をなぐさむを  
エ  
は  
欲しい。」  
野坡が言うことには、  
「苦しい時も楽しい時も、心を和やかに

風人といふ。今宵のこと、ことにをかし。されど、  
オ  
するのを風流人と言う。  
今夜のことは、  
格別に面白い。  
けれども、

ありのままに句に作らば、我は盗人の中宿なり。  
私は盗人に宿を貸した者となる。（窃盗の共犯者として罪人になる。）

ただ何ごとも知らぬなめり」と、  
ただ何事も知らないようです（どうしてか）しておいて下さい。」と、

かくいふことを書きて与ふ。

このような俳句を書いて(盗人に)与える。

カ  
す  
ず  
め

垣くぐる雀ならなく雪のあと

垣根をくぐった雀ではない足跡が、雪道に残っている。